

4 3. 古長 由里子 (日本 IBM デジタルサービス株式会社 九州 DX センター長)



「豊富なコンテンツを紡ぎ、レジリエンスがある持続可能なまちになって欲しい」

古長 由里子 (ふるなが ゆりこ)

北九州市出身。

日本 IBM でクラウドや AI のビジネス開発やマーケティングを歴任後「IBM Future Design Lab.」を設立。課題解決者との交流を軸に、テクノロジーと信頼でより良い未来を拓く共創活動を推進。2023年2月より、IBM九州DXセンター長に着任し、再び北九州市へ。産官学連携でのDX/GX推進や人材育成にも注力。全国地域DXセンターのブランディングを担当。

「レガシーを残しストーリーとして伝える」

北九州市といえば、ものづくりの歴史が挙げられます。日本の近代化に貢献した施設や五市対等合併のプロセスなども良いレガシー(遺産)であるため残すべきではないでしょうか。

そこでは、歴史ある施設などをうまく残すことも必要でしょう。若松南海岸通りの古い建物は素材や建築方法が「豊かな良い時代」のもので、技術の結集でもあります。メリハリをつけて良いものを残して多くの人に見てもらうことが重要です。

一方で、「北九州市」として語られるストーリーが少なく、「門司」「若松」といった個別エリアのものが多いと感じます。しっかりと市全体の価値を多角的に捉えてストーリーとして伝えることが必要です。

人の特徴は、温かみや親切さが挙げられるでしょう。面倒見がよく、放っておかない気質、人と人との距離が近く、意識しての受容ではなく、多様であることを当たり前だと思っていると感じます。一度、北九州市を出て、再び戻ってきて改めてそれを感じているところです。

「多様なコンテンツを体験価値に」

「北九州にはポテンシャルがある」を「北九州市には素晴らしい多様なコンテンツがある」と言い換えたいですね。自然については、平尾台もそうですし、工場夜景や若松の岩屋の夕日

は市外から来た人に見せるととても喜んでくれます。もっと市民一人ひとりが自信を持って情報発信すると良いと思います。

また、インフラも充実しています。医療、歴史もありますし、プラス要素として芸能・スポーツ・アニメといったソフト面のコンテンツもあります。大学、教育機関も多く、素晴らしい人材を有していますよね。

しかし、これらのコンテンツや人材をコトづくり(体験価値)にできていないように感じます。また、それらが体系的にデザインされず、点在するに留まっている印象です。ここでも、顧客向けの発信方法が不十分だと感じます。ペルソナ(典型的なユーザー像)を考えて、「個人に対してどのような体験を線や面で伝え、感動してもらうか」という視点が必要でしょう。

「技術企業のエコシステムにも期待」

当社が北九州市に拠点を置いたのは、専門人材が豊富な点を評価したからです。また、投資先としてのパフォーマンスが良いと思います。家賃にしても、採用コストにしても、まちの中の移動効率についても感じています。加えて、産官学の距離感が近いのも大きな魅力です。

特に当社のDXセンターにおいて、市内に蓄積されたものづくり産業の技術的な企業のエコシステムは、魅力的なコンテンツだと思えます。当社の先端技術との親和性があり、それを

活かすフィールドがあるということです。

「レジリエンスがあるまちへ」

15年後の日本は予想不可能です。誰も思っていないようなまちになれば良いですね。いくつかキーワードがありますが、その一つは「レジリエンス」です。姿かたちを適応させていきつつ、しなやかで伸びしろがあることを意味し、フレキシビリティ（柔軟性）とは違います。耐性があり、常に変わっていくような「レジリエンス」があるまちを目指すべきだと考えます。安全に暮らせる、ウェルビーイングを包含している、「レジリエンス」がある、そのようなまちになることを期待しています。

最近、多拠点で生活するスタイルが注目を集めています。北九州は交通アクセスも良いし、多様な生き方を受容する風土があります。働き方の選択肢も増えている今、ワーク・ライフ バランスがとりやすい北九州が 2 拠点目の住まい候補地となるといいですね。

開かれた港町としてのレガシーやノウハウを誰も想像し得ない 15 年先に向かって、変化を楽しむ、自ら変わっていくということによって、ものづくりのノウハウや人材が生かされることになるのではないのでしょうか。

そして、儲かるコトづくりとして、例えば環境先進都市としての技術コンテンツを使うということがあり得ると思います。

「豊富な人材が集う仕組みづくりを」

「豊富な人材を持つ」「世界を相手にする」という 2 点を柱にすると良いと思います。労働力ではなく、高度専門家としての外国人材を招聘してはどうでしょうか。また、多様性のあるまちとして、外国人だけでなく、女性や障害をお持ちの方も含めてのインクルージョン(包摂)は重要です。

海外からの移住者の受け入れも必要でしょう。北九州市には英語を話せるビジネスパーソンが多いと感じています。北九州発のグローバ

ル企業もあり、海外転勤もあるはずですが、それとは逆に北九州市が目指している環境・エネルギー・物流について、それを補うために世界中から優秀な頭脳を集めてくる発想もありえるのではないのでしょうか。

しかし、市内大学に留学生は多数いますが、北九州市内への就職者は少数です。今後は、大学を人財育成拠点としてより機能させる方法もありますし、関係人口として、一度北九州市から離れた後も「先生」として呼び戻せるような関係をつくれると良いと思います。

「レジリエンスある持続可能なまちを」

ヨーロッパでは、コペンハーゲンもバルセロナなど多くの都市で、都心に車を減らして、自転車や歩行者が優先されるまちづくりを進めています。公園も整備され、中央分離帯のようなどころにおしゃれなカフェが出店しています。小倉の紫川周辺などでもこういったまちづくりが向いているように感じます。また、美食の街として有名なスペインのバスク地方では、ピンチョス(つまんで食べる軽食)を楽しみながら複数のバル巡りをしたり、有名なシェフの料理を目当てに海沿いのオーベルジュを訪れたり「食」を中心とした観光が根付いています。このようなことは北九州でも実現可能で、海外からの観光客をおもてなしできるのではないのでしょうか。

先述した歴史や自然、食文化、などの観光コンテンツを活用し、少し視点を変えてコンセプトを練り直し、キュレーション(情報編集・価値創出)していくと良いと思います。

「レジリエンス」はキーワードになります。持続可能ではあるけれども、ずっと一定の状態をキープするのではなく、形を変えながらしなやかに進んでいく、それに追加して「インクルージョン」があり、お互いに尊重し合うということができれば良いのではないのでしょうか。